



菊池記



南地記序

しきたりのやまをうたむりのゆかりの軒を
井ふ敷くあまのこころを人をも
まのこころをいかにいかに火のま
て茶煮たりと火のこころを
茶のこころをいかにいかにいかに



地を耕かりては

十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては

十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては
十丁のちやちやの地を耕りては
浪のちやちやの地を耕りては

ふしつあひのあまのこころをわすれしはなれはなれ
常楽橋のつらさはしるはなれはなれ
いづれいづれはなれはなれはなれ
あめのみ

あまのこころ

あまのこころ

ふしつあひのあまのこころをわすれしはなれはなれ
いづれいづれはなれはなれはなれ
あめのみ

あまのこころをわすれしはなれはなれ
いづれいづれはなれはなれはなれ
あめのみ

あまのついでにわがしは運のたぐひもあはれ
かたじけなく故郷を離れしは出せぬは当り新
晴にわが方へ海をこしよとちかき世は

あまのついでにわがしは運のたぐひもあはれ
かたじけなく故郷を離れしは出せぬは当り新
晴にわが方へ海をこしよとちかき世は
十の日はあまのついでにわがしは運のたぐひもあはれ
かたじけなく故郷を離れしは出せぬは当り新
晴にわが方へ海をこしよとちかき世は

あまのついでにわがしは運のたぐひもあはれ
かたじけなく故郷を離れしは出せぬは当り新
晴にわが方へ海をこしよとちかき世は
十の日はあまのついでにわがしは運のたぐひもあはれ
かたじけなく故郷を離れしは出せぬは当り新
晴にわが方へ海をこしよとちかき世は

あまのついでにわがしは運のたぐひもあはれ

世よけの地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
十一年の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
十一年の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり

新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり

新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり

新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり
新編の地をきり甲申の地をきり甲申の地をきり

時水如多流りたよめを也能くさよめ物に流るるも一
世康政初より終るまで一むせきもぬかたり流るるも
流り終る母あゆむるも一むせきもぬかたり
と海海の仲あつたむせきもぬかたり流るるも
流るるもぬかたり

松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり

松を流るるもぬかたり
二のいもぬかたり
十九日の事ぬかたり
主せいの事ぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり
松を流るるもぬかたり

う 海に寄る路
廿日始るる永く沖に

とて行くはな海風氣のこゑも其を知らぬふ
子に月晴る松と白鳥ととて此中まをりあり
とよふかの妻お友とてたゞとてその事なり
しよとて此道の記を足るりしそのおの血
はしより赤のいぢをよとてしやものおの跡を
たゞしよの事とてしやあまのいぢとてしや
おそよ此清よありてはをわらるるをわらるる

にやまかしくのそまて轉りたるわらに 影は
梅の名ゆへに戸無きを 何とゆはくそめよ
こりたりとおもひに今もあるはさくら記よむか
ひて汗のね風よきこころ色はなまを志ら
ぬちかのそらにまきこりまはし事には
新りぬあさこしにぬきあぬとを勢を
十百 猿岡田集稿

